

アイルランド演劇を掘り起こす(6)

——ジェイムズ・コノリー『いずれの旗のもとに?』

河野賢司

はじめに

武装蜂起の指導者の一人として屈辱的な処刑¹を受けてナショナリズムに殉死した活動家——拙論執筆に先立つ筆者のコノリー認識はその程度のものであった。アイルランド現代史の著名な人物ではあっても、劇作家や小説家でないコノリーに関して筆者はこれまで詳しく調べてみたこともなかった。しかしながら、最近刊行された『アイルランド叛逆劇4篇』(*Four Irish Rebel Plays*, 2007)にはコノリーの戯曲『いずれの旗のもとに?』(*Under Which Flag?*)が収録されており、これは10年ほど前に刊行されたアイルランド文学事典²では「現在は散失」(*now lost*)と記載されている、いわば幻の作品³である。

『アイルランド叛逆劇4篇』の編者ジェイムズ・モラン⁴によれば(274-277)、『いずれの旗のもとに?』の原稿再発見の経緯にはいささかの紆余曲折がある。直接的には60年代後半にコノリーの長女⁵ノラ(Nora Connolly O'Brien, 1893-1981)がアイルランド国立図書館職員に調査協力を依頼し、1969年3月、ある勤勉な文書係がこの戯曲⁶を発見し、早くも5月13日にはアビー劇場演出家シンプソン(Alan Simpson)の演出とアビー劇場俳優陣によって、新築の自由会館で実に53年ぶりに「再演」されたという。しかし、さまざまな事情が災いしてこの再演は失敗に終わり⁷、ふたたび原稿は図書館資料庫に眠ることになった。その後、コノリー研究書の執筆準備で調査をしていた女性(Ann Barton Reeve)がこの原稿を見つけ、ニュー・ヨークのアイリッシュ・アーツ・センター(Irish Arts Center)にコピーを送り、センター職員らが台詞をあらたに追加するなどして手を入れた改版が、いまや映画監督⁸として有名なジム・シェリダン(Jim Sheridan, 1949-)の監修で1986年に上演され⁹、1997年には博士論文でも取り上げられるなどして、再評価の動きが高まったという。筆者はこうした経緯にまったく疎く、このたび初めてコノリーの戯曲を読む機会を得た次第である。戯曲の内容に立ち入る前に、まずコノリーの経歴について簡単にまとめておこう。

I 作者略歴

ジェイムズ・コノリー (James Connolly, 1868-1916) は、1868年6月5日、スコットランド、

エディンバラのスラムにアイルランド人の両親のもとに生まれた。学業は11歳でやめ、様々な職に就いた後、14歳から21歳の時期（1882～89年¹⁰）は英軍に入隊し、16歳以後はアイルランドのコークに派遣され駐留している（この英国軍籍の意味については第Ⅱ章第4節で詳述）。その後、彼は社会主義に強い信念を抱くようになり、1896年にダブリンに移住後、98年に「アイルランド社会共和党」（Irish Socialist Republican Party）を結成し、機関誌『労働者共和国』（*The Workers' Republic*）[第1期]を1903年まで編集した。その後の訪米によって、台頭する労働運動やストを主張する急進的労働組合主義（サンディカリズム）にも関与していった。ニュー・ヨークに拠点をおく「アイルランド社会主義連邦」（Irish Socialist Federation）のために『ハーブ』（*The Harp*, 1907-10）を創刊し、アメリカ時代のコノリーは次第にナショナリスト的政治観を強めていく。

1910年にダブリンに戻ると「アイルランド社会党」（Socialist Party of Ireland）を組織し、1911年には「アイルランド運輸・一般労働者組合」（ITGWU: Irish Transport and General Workers' Union）のベルファースト代表に任命された。1912年労働組合代表者会議でアイルランド労働党結成動議が採択された2年後、コノリーはジェイムズ・ラーキン（James Larkin, 1874-1947）の後継者としてITGWUの指導者に着任した。1913年には「封鎖スト」（Lock-Out Strike）の間に労働者の権利を守るために市民軍（Citizen Army）を創設し、みずから司令官となった。1911年から編集した『アイルランド労働者』（*The Irish Worker*）が1915年に政府によって発禁処分を受けると、すぐさま『労働者共和国』[第2期]を再刊した。1914年に第一次大戦が勃発すると、労働者の戦争参加を非難し、マルキエヴィッチ伯爵夫人（Countess Constance Markievicz, 1868-1927）らとともに、アイルランドへの軍事徴兵制の導入に強く反対した。1916年、ダブリンの共和軍の指令官に任命され、4月24日、中央郵便局を本拠に蜂起行動を指導した。この戦闘で重傷を負ったが、英国軍事法廷で死刑判決を受け、椅子に座って縛られた状態で5月12日にキルメイナム監獄（Kilmainham Jail）で処刑された。あと3週間で48歳を迎える若さでの死だった。

Ⅱ 「いずれの旗のもとに？」

(1) 「いずれの旗のもとに？」の初演状況と時代設定

『いずれの旗のもとに？¹¹』の初演は1916年3月26日、ダブリンの自由会館¹²（Liberty Hall）において「アイルランド労働者劇団」（Irish Workers' Dramatic Company）によって行なわれた。復活祭蜂起のほぼ1ヶ月前にあたる切迫した時期である。労組の本部が置かれた、「労働者のバスチーユ」の異名を持つ自由会館には、もともと1912年の改装時にラーキンによって劇場が

開設されており、ラーキンの妻ディーリア (Delia) が「アイルランド労働者劇団」を運営してミュージック・ホール的出し物の公演を行っていたという。しかし1915年にディーリアとコノリーが意見衝突し、彼女が7月にダブリンを去りロンドンに移ってからはコノリーがこの劇団の主宰者となり、かつて不定期だった公演は1915年9月以降は月ごとに、12月以降は週ごとに、定期公演化するようになった。¹³

復活祭蜂起の計画についてコノリーが IRB から初めて知らされたのは、1916年1月¹⁴とされ、2月20日には自由会館内に新しい劇場をオープンさせ、娯楽志向から革命路線へと劇場の機能転換を図っている。この折に劇団員たちからの要請を受けて書き上げたのが『いずれの旗のもとに?』である。随分以前から戯曲の構想を暖めていたのか、それとも一気呵成に書き上げたのかは定かではないが、後者であるとすれば初演の5週間前であり、舞台稽古期間を考えれば、おそらく極めて短期間で要請に応じて脱稿したものと推測される。(この点は、演劇作品としての完成度にも関係してくるであろう。)

初演2日前の3月24日には自由会館で緊迫した事件が起きている。ダブリンのナショナリスト系新聞『ゲイル』 (*The Gael*) 紙に不穏な記事が掲載されたとして軍事当局がこの新聞の全面的差し押さえに乗り出し、自由会館内の「労働者協同組合」の書店も搜索を受けた。気丈な女性店主は搜索令状の提示を断固要求し、将校たちがいったん引き上げたうちに、連絡を受けたコノリーは市民軍を動員して、50人以上のライフル部隊や歩兵隊で自由会館の周囲を防備した。これ以降、一触即発の臨戦体制が自由会館に敷かれ、二階建ての自由会館の屋根には警備兵が配置されたなか、初演が行なわれたのだという。おそらくこの1回限りの上演、かつ限られた関係者のみが観劇したのだろうと、入手した資料からは推察される。

なお、4月8日付けの『労働者共和国』には「アイルランドの旗」と題されたコノリーの記事が掲載され、アイルランドの緑の旗を自由会館に掲げることを宣言している。まさしく文字通り、反旗を公然と掲げた訳である。復活祭蜂起の「共和国宣言」の宣言文書も初演後まもなく、自由会館内のコノリーの印刷機によって印刷され、蜂起の準備は着実に進行していくことになる。

著者略歴でも触れたように、アイルランドに徴兵制度が導入されようとしていた時期であることもこの作品に大きく関係している。1915年末の時点でアイルランド人の英軍入隊者はおおよそ8万6千人(ダブリンからはそのうち1万7千人)が志願していたとされ、志願兵の多くは都市貧困層の出身者で、小農や自営業者は入隊に強い拒否反応を示したという。¹⁵ コノリーは1916年2月12日付けの『労働者共和国』に寄せた「自由な民族とはなにか」の論説のなかで、反・徴兵応募の論陣を展開している。

戯曲『いずれの旗のもとに?』の時代設定は、ほぼ半世紀前の1867年3月。アイルランド史では「フィニアン蜂起¹⁶」あるいは「67年蜂起」と呼ばれる事件・時期を扱っている。さらに言えば、盲目の登場人物ダンが関わった「青年アイルランド党の蜂起」（あるいは「48年蜂起」）も劇中で言及される。したがって形式上は、この戯曲は19世紀を扱う歴史劇に属する作品である。

初演のキャストで、盲目のダンを演じたのはショーン・コノリー¹⁷ (Seán Connolly) というアビー劇場の俳優で、この芝居に強く刺激されたためか、復活祭蜂起が始まると14歳の弟マットとともに決起し、アイルランドの緑の旗を掲げようと市役所の屋根に上ったところを英軍の狙撃兵に射殺され、蜂起の最初の犠牲者となった。イエイツも「1つの折り返し句へ連なる3つの歌」(‘Three Songs to the One Burden’) という最晩年の詩(1939年5月)の3番目の歌の第2連¹⁸で、大いに将来を囑望された俳優ショーンの早すぎる死を悼んでいる¹⁹。ちなみに、ショーンの妹ケイティ・バレット (Katie Barrett) ーうら若い彼女も初演では主婦エレンを演じたーも市役所占拠に合流している。自由会館の役者たちは、さながら舞台を市街に移して、自らの役を演じきったかのようなようである。

(2) 『いずれの旗のもとに?』の梗概

第1場 小規模農業を営むパット・オドンネル²⁰ (Pat O'Donnell) 家の台所。パットの妻エレン (Ellen O'Donnell) が18歳の養女メアリー・オニール (Mary O'Neill) を相手に糸巻き作業中。(孤児メアリーはオドンネル家に引き取られて同居し、パットやエレンを「叔父さん」「叔母さん」と呼んでいる。) メアリーが伸ばした両手に持つ羊毛をエレンが毛毬のように巻いていくのだが、メアリーがほんやりと心ここにあらずの状態にあるために、もつれてうまく進まない。作業相手が次男坊フランク (Frank) だったら気合が違くだらうにね、と冷やかされたメアリーは、フランクは私を妹のように扱ってくれる、とかわす。たしかに兄は妹を可愛がるものだけれど、それはたいていの場合、実の妹ではなく人様の妹だ、とエレンは懸念をのぞかせるものの、まだまだ二人とも子どもだから心配には及ばないだろう、と気を取りなおす。

一家の主人パットと長男ジョン (John)、次男フランクが農作業を終えて帰宅する。寒い戸外で仕事をしてきたのに炉の火が貧弱で暖房が効いていないぞ、ぬくぬくと脛を暖めている身にはそんな配慮も浮かばないのだな、とパットに文句をつけられてエレンは腹を立てるが、農作業中もずっと父さんは小言ばかりだったから気にしないように、とジョンがとりなす。お説教は父親、労働は息子2人が専従する「公平なる分業」(a fair division of labour [108]) であり、言葉巧みな父さんは国会議員にでもなればいいのに、とジョンが皮肉ると、「国会と刑務所は、

アイルランド人ごろつきを調教すべく、イングランド人が考案した施設であり、狂暴なごろつきは刑務所へ、ほんまにひどい連中は国会へと送られる」²¹とパットは警句をとばす。

エレンは夕食（ジャガイモにバターミルク）を勧め、パットとジョンは食事にとりかかる。フランクはメアリーの顔を覗き見ようとするが、彼女は肩越しに視線は投げるものの、たえず居ずまいを正して、フランクに背を向ける。フランクに話しかけられても、彼女は糸巻き作業に忙しいふりをし、「ウィリー・ライリー」（‘Willy Reilly’）の唄²²を歌いだす。フランクは所在なげに鋤に触ったりしてメアリーの反応を窺うが、彼女は別の唄「おお、バラトレインのテニス」（‘O Tenneson of Ballatrain’）の一節²³を歌いだす。しかし、歌っているながら歌詞の意味する内容が分からない、と漏らすメアリーに、聖ステューヴンの日（12月26日）の夜、かがり火の周りに佇んでいた無辜のカトリック教徒たちに向かって無差別に発砲した、オレンジ会の義勇騎兵団²⁴隊長（a captain of the Orange yeomanry）にちなむ唄なのよと、エレンは解説する。それを聞いたパットは、同じ火でも我が家の暖炉の火なら、周りどころかその上に乗っても危なくない、我が家の火は、新築の教会堂の家に引っ越した司祭の所在と同様に、そのハウスキーパー（主婦・家政婦）に訊いてみないと、なかでくすぶっているかどうか分からん始末だ、と暖房の弱さを蒸し返す。

フランクは、メアリーが羊毛を背凭れに掛けてある椅子を使わせるように頼み、メアリーの手の上にまんまと自分の手を重ねて、ようやく彼女の気をひくことに成功する。

盲目の男ダン・マクマオン（Dan McMahon）が杖で道を探りながら近づき、メアリーが家の中へ案内する。気をきかして早く暖かい隅にダンを座らせるように、パットはジョンに指示し、ジョンは従う。すらっとした紅顔の美青年だったダンに、若い娘たちは自分の姿を目に止めて欲しがっていたものだ、と過ぎし日々を思い起こしてエレンは涙ぐむ。パットは、みなそれなりに今も悲しみがあるのだから、昔を嘆いても始まらない、と宥める一方で、エレンと駆け落ちしそうなのは自分ではなくダンの方だろうと思ったものだが、そうしてくれなかったことをいまでは怨んでおるよ、とふざける。エレンは腹を立てながらも、過去を深刻に考えすぎるとジョークに変えてしまうのが夫の流儀であり、仲間内では冗談をとばし、独りになると悲嘆に暮れるのは、アイルランド人の流儀でもある、と補足する。

メアリーは、人々の口ぶりから、若い頃のダンが盲目ではなかったように思われ、なぜ失明したのだろうか、とエレンに尋ねる。本人のいる前でプライベートな話題を持ち出すメアリーの非礼を詫げるエレンに、ダンが率直に失明の経緯——メアリーの生まれる前にこの国で起きた蜂起に自分も加わり、逮捕され投獄された獄中で失明した——を淡々と語って聞かせ、誰か特定の個人が受けた虐待に関して泣いたり呪ったりして激昂しても始まらない、虐待を受けて

いるのは国民全体であり、国家が主権を取り戻すまでそれは続くことを認識しなければならない、と論ず。

ダンの話を聞いていたジョンは、この国は男子が一生を過ごす所ではなく、地主や王室および貧者を食い物にする連中のためにあくせく働く奴隷にこそ相応しい国であり、かねてから考えていた通り、自分はアメリカに移住すると切り出す。エレンは、衣食住すべての面で、貧富の格差社会であるのはアメリカとても同じこと、故郷に錦を飾れる成功者は1%にすぎず、ほとんどのアメリカ移民は故郷アイルランドの緑地や家族を懐かしんで悲嘆に暮れているのよ、と家族や故郷を捨てる非情な決意を固めたジョンを咎める。

フランクも、たしかに故郷に錦を飾れたのは100人のうち5人といない、と母親エレンの意見に賛同したうえで、兄ジョンは移民せずに両親の面倒を見て、家を出るのは次男の自分のすることであり、自分はイングランド軍に入隊しようと思う、と爆弾発言を行なう。フランクによれば、英軍入隊のメリットは見聞の拡大、好待遇、除隊後の軍人恩給であり、アメリカで野垂れ死にするのと違い、生まれ故郷で恩給生活による余生を過ごせるのである。

これを聞いたパットは大いに嘆き、恩給とは英国政府が支給する殺人報奨金であり、その金で購われた食べ物には、国体護持のために殺害された人びとの血糊が付着している、と非難する。フランクは金に色はついていないと冷笑し、軍人恩給受給者は女にも持てるんだ、とつい口を滑らせ、入隊のお目当ては恩給ではなく女なのね、とメアリーからも疎まれる。軍人でなく警官志願ならまだましかも、と言うエレンの言葉に、メアリーは（他人の受け売りだが）、軍人よりも警官の方がいっそうたちが悪い、軍人は命がけでお国のために戦うが、警官はリスクもおかさずに、酒席や礼拝の同朋を偵察しつつ、いかにして仲間を投獄や処刑できるか企んでいる裏切り者である、もしそうなら、（極悪の警官ではなく）軍人を志願するフランクを非難しても仕方がないわ、と語る。ダンもメアリーに同意し、ジョンは自分のアメリカ移民計画に軍配が上がったものと早合点するが、移民はいわば脱走兵であり、裏切り者の警官や軍人と同じ穴の貉である、とダンは断言する。

フランクは、アイルランドの農家では長男が後を継ぎ、次男以下は司祭かパブ経営者か警官になるしかない、聖職の意欲もパブ経営資金もない次男の自分がアイルランドに残るには（警官と同等の）軍人になるしか道はない、と反論する。ダンは、英国軍人となることは敵から殺人報奨金を得ることであり、英国の金で飲み食いしても墮落したことにはならないと思っている戯^なげどもこそ亡国の徒であると喝破し、聖餐のパンとワインが心を清めるのと同様に、英国の汚れた金で購われた飲食物はアイルランド人の魂に毒を盛っているのだぞ、と激しい口調で訴えて、ひとりで立ち去る。怯えるメアリーにエレンは、あそこまで厳しく考えればアイルラ

ンドでは暮らしていけないわ、とダンの姿勢を批判するが、すくなくともイングランド人は暮らせないだろうな、とパットはダンを擁護する。幕。

第2場 翌日（木曜日）の夜の田舎道。フランクとの待ち合わせのためにメアリーが登場。1時間以上も待ちぼうけを食っているが、「かわいい乳絞り娘」²⁵（‘Cailín Deas Crúite Na Mbó’）や「勇敢なる軽騎兵」²⁶（‘The Gallant Hussar’）を口ずさんで気を紛らわせる。ジョンのアメリカ移民の前夜には賑やかな送別会（いわゆる「アメリカの通夜」American wake [116]）が催されるだろうが、フランクは本当に英軍に入隊をするのだろうか、するとすればいつだろうか、私の恋心とおなじくらい、帰国後も私を想ってくれるだろうか、などと思案を巡らし、男に生まれていたら世間をあっと言わせて評判になるようなことができるのに、と残念がる。いっこうに姿を見せないフランクに痺れを切らせて帰りかけたとき、メアリーは号令らしき声を耳にする。一瞬、妖精かと怯えたものの、聞き覚えのある声だと気づいて木立から様子を窺うと、いずれも顔馴染の男たち——ヘガティ（Matt Hegarty）、バーンズ（Ned Burns）、鍛冶屋のフォード（Paddy Ford the blacksmith）、靴屋のジャック（Jack the shoemaker）、仕立て屋のフラナガン（Flanagan the tailor）、ラファティ（Tony Rafferty）、ヘイドウン（Dan Hayden）、ケイスイー（Peter Casey）、ジェラティ（Mick Geraghty）、学校教師など——が射撃練習を行なっているのだった。

このニュースをみんなに伝えようと駆け出したメアリーは、ちょうどやってきた盲目のダンと思いがけず衝突する。地主や警察をはじめ誰もが知りたがるだろうニュースを得たことでメアリーは大はしゃぎしている。なぜなら、軍事演習に励んでいた男たちに必ずしもメアリーは好感を抱いていなかったためである。たとえば、撫で付け髪の商店主ヘガティは、「大邸宅」暮らしのジェントリー階級の顧客には愛想がいいくせにメアリーなどの貧乏客は冷遇する。だから店が客で賑わうころを見計らって、「木曜の夜、森の奥で軍事教練に使った銃はどこにしまっているの？」と爆弾発言すれば、相手は髪のパマードも取れんばかりに飛び上がって驚き、店内は騒然、自分は一躍注目されるだろう。また、教会の日曜礼拝で喜捨集め係りの大男バーンズは、文無しと知っているくせにいつもメアリーの鼻先で寄付皿を振り回し、先週は赤の他人に席を譲れと強要した。だから、バーンズの後ろの席で会衆の出入りを監視している巡査部長に聞こえよがしに、「木曜にあんたが持っていた銃は立派なものだったけど、教練の腕前がいまいち良くなかったのは残念だわ」と言ってやれば、喜捨を私に迫るような無礼な真似は今後しなくなるだろう。靴屋のジャック爺さんは、エレン叔母さんの靴の修繕が済んだか確かめにいく度に、リューマチがひどくてね、と言いつついた癖に、こうして夜中に教練に参加し

ている。仕立て屋のフラナガンは、商売道具の（「雁首」型取っ手のついた）「火熨斗」^{アイロン}（goose²⁷）の代りに銃をもち、その様子はまさに（芦屋）「雁之助」（goose²⁸）だった。

メアリーが以上のように一人でまくしたてている間に、盲人のダンは彼女にじりじりと近づき、伸ばした片手でメアリーの手を探し当て、腕を押さえるので、彼女は小さな悲鳴をあげる。ダンが怖がらせたことを詫び、メアリーとの初めての出会いの話を始める。病床にあるメアリーの実母のもとに案内されて新生児のメアリーを抱きかかえた時の柔らかな感触や笑い声、ダンの耳を引っ張る指に、盲目の目から不覚にも涙がこぼれたことを。メアリーもそれに応じて、ダンがいつも玩具をもって家を訪ねてくれ、学校の登下校時には迎えに来てくれたこと、ダンを自宅まで送ることを許そうとしなかった父親²⁹に、盲人には昼夜の区別などないことに思い至らず、暗い夜道を理由に反論した思い出を語る。

メアリーに親切だったのはなにも自分だけではないというダンの言葉に、メアリーは頷く。病気で死にそうになったとき、多くの人々が昼夜をおかず、さまざまな贈り物——花、食品（パン、バター、ゼリー、砂糖、紅茶）、衣類（白い敷布や靴下）、宗教的なもの（聖アンソニーの絵画や祈祷書）、鳥の又骨³⁰（wishing bone）など——を持ってお見舞いに来てくれたこと、ときには不機嫌な態度をとられても——それは窺い知れない悩みが彼らにもあるからだろう——基本的にはみんなから愛され、悪く言われてこなかったことを振り返る。しかし、長話を切り上げてニュースを伝えにふたたび急ごうとするメアリーをダンは慌てて押しとどめて坐らせ、話を続ける。

この教区に誰からも忌み嫌われ、悪霊のように町を徘徊している者はいないか、とダンは水を向ける。子どもは怯え、老女は小声で呪いの言葉を発し、飢えている貧乏人でさえ施しを拒むような者はいないか、と。メアリーは、密告者のフィネガン老人（Brian Finnegan）の名を挙げ、呪われた彼の姿が近くにあるだけで、^{いち}市での家畜売買や旅行、冠婚葬祭は取り止め、ないし延期になるほどだ、と怯える。ダンは即座に、そのフィネガンのように唾棄・蛇蝎視されるような人生を送りたいか、とメアリーに問い質す。フィネガンが忌避されているのは、若いころ彼が密告行為を働いたからであり、メアリーが目撃ニュースを喋れば彼の忌まわしい二の舞になるのだと、ダンは論ず。——メアリーが名前を洩らす男たちは警察や兵士に縛られて投獄され、アイルランド解放の軍事教練をしたかどで、法廷で裁判にかけられる。しかし、その教練の目撃証言者、つまりは密告者が証人台に立つまでは死刑判決の宣告や執行はかなわない。英国当局はかならずや証言者を連れてくるだろう。そして、若者たちを縛り首にする証言を行なって、死後も代々呪われつづけることになるのは誰だろう。しこたま英国金貨を得たところで、アイルランドを裏切って得た金で買った食べ物には血がべつとりと付いているのだ、と。

——しまいにはダンは跪いて、メアリーにたたみかける。かつてフィネガンが自分に対して行なったように、若者たちを絞首刑や終身禁固刑にするつもりなのか、今夜森の裏で目撃したことを口外するつもりなのか、と。

メアリーは否定の言葉を繰り返して、「もう生きていたくない、先に死ぬわ」と両手に顔を埋める。幕。

第3場 第1場と同じ台所。翌晩（金曜）と推測される。オドンネル家で久々にケイリ（歌や踊りの集い）がまもなく開かれる予定で、客人が現れるまでパットはパイプを吹かし、エレンは髪具合やエプロンを気にしている。明けても暮れても古女房の顔を目が痛くなるまで見ているばかりだから、たまの気晴らしは歓迎だ、と言うパットに、昔は、私を見つめるのがこの世で一番の喜び、目の保養になると持ち上げて、ストーカーまがい私に付きまといたくせに、とエレンは切り返す。そうした若気の至りを、結婚生活30年間、悔悛のうちに過ごしてきた訳よ、といなして、パットは昨夜メアリーがうごごと譚言のように寝言——「森」、「森の奥の男たち」、「ダン」、「ブライアン・フィネガン」——を漏らしていたと話題を変える。大方、夫が寝惚けて夢の中で見たことか、入隊前にフランクがメアリーを森で口説こうとしたのだろう、とエレンは相手にせず、なにかを捜し回って、パット同様に〈目が痛く〉なったのかもしれないが、父親譲り³¹だとすればその探し物が仕事ではないことは確かだわね、と話題をもとに戻そうとする。「仕事ばかりするのは下劣なことさ」（‘Tis a mane thing to be always working. [125]）とパットが居直ると、「とにかく、あんたにはその種の下劣さは欠片^{かけら}もないわねえ」（There is none of that maneness in you anyway. [125]）とエレンはやりかえす

食卓の片付けをするうちに、客人たちが近づくの窓越しに見つけたエレンは、パットに礼儀正しい出迎えを指示し、自分は急いで食卓の片付けや暖炉前の掃き掃除を始める。

大げさな歓迎の言葉に加えて、2時間も前から首を長くして待っていたとか、席が足りんなら各自、お相手の膝の上に坐ってもいい、「膝の上が一番坐り心地がいいわ」と女房もついさっき言っておったわ、とパットは駄法螺を吹き、いつもの与太話ですから気になさらないで、とエレンは訂正する。千客万来にもかかわらずメアリーが姿を見せないで、エレンは彼女の名を呼ぶ。

俯いて部屋から出てきたメアリーは、今日はずっと軽い頭痛がすると言って、椅子に座ったまま虚空を見つめる。パットとエレンは諦めて客人の方へ行く。来客たちはペアになって着席し、若者たちは男女でふざけあい、年長者たちは炉端^{たむろ}に屯してその近くに盲目のフィドル奏者が坐る。パットはまずパディ・フォード（Paddy Ford）に歌を一曲歌って貰うように頼む。

フォードは、昔日のためにはもちろん、来るべき未来のためにも歌おうと言い、青年たちは顔を上げて「その通りだ、未来のために」と賛同する。

フォードは愛国歌（「^{ほこぶく}鋳り³²」[‘The Forging of the Pike’] ないし「ジョン・ミッチェル³³」[‘John Mitchel’]）を手始めにいくつかの曲を歌い終わると、リールを踊るパートナーを決めるように指示する。パートナー申込みの混乱が始まり、フランクはメアリーの肩に手を乗せて申し込むが、彼女は踊る気になれないと拒否する。この3年間いつも率先してペアで踊ってきたのに、なぜよりによって今夜は駄目なのか、と跪いて顔を覗き込んだフランクは、彼女の異様な形相³⁴に驚き、引き下がる。リールが終わると、さらに何曲か歌が歌われ、ジグないしホーンパイプが踊られる。フィドル奏者はセット・ダンス「リムリックの城壁」（‘The Walls of Limerick’）³⁵の隊列編成を呼びかける。

フランクは再度メアリーに相手役を申し込むが、彼女はこれも拒否する。フランクは今日、徴兵官（recruiting sergeant）に会って入隊申込みを済ませ、明日には英国兵の制服「赤いコート」を着て兵舎にいるだろうからこれが最後の機会になるかも知れない、と懇願して引き出そうとするが、メアリーは執拗に抵抗し、また坐って虚空を凝視するので、フランクは不機嫌になる。セット・ダンスが終わると歌のリクエストがあり、歌の後でフィドル演奏が始まると、盲目のダンが戸口に姿を見せる。フランク以外の青年たちは一人ずつ順番にダンのもとへ行き、ダンからなにやら囁かれた彼らは席に戻るやそっと戸口から出て行き、フランク以外の青年は全員いなくなる。娘たちは反対側の戸口でかたまって談笑し、年配者たちは炉端で一服しているので、青年たちの失踪に気づかない。演奏が終わり、拍手喝采。

名演奏だと褒めるパットに、娘たちが床を踏み鳴らす最高の音楽を聞きたいからと「エニス³⁶の攻城」（‘The Siege of Ennis’）のダンスを盲目のフィドル奏者は呼びかける。娘たちやエレンは青年たちが忽然と姿を消したのによりやく気づく。ダンは、「アイルランド共和同盟³⁷」（The Irish Republican Brotherhood）から今夜、指令が出され、アイルランド全土で青年たちはみんな蜂起に立ち上がったのだと宣言する。

しかしメアリーはフランクの腕をつかんで、立ち上がらなかった者が一人いる、と訴え、みんなの視線を浴びてフランクはうなだれる。

戸外から行軍の歌声が聞こえ、みんなが窓辺に駆け寄るなか、フランクは目頭を押さえ、メアリーは彼の髪を撫でる。歌声が止み、みんなの視線が二人に戻る。

蜂起計画を秘密にしていたことをとがめるフランクに、私やアイルランドを愛しているなら青年たちと行動を共にしてほしい、とメアリーは依頼する。フランクは直立して同意し、君に恥をかかせるようなことはしない、と飛び出していく。これで本当に全員が出発したわ、とメ

アリーはダンに伝え、出征した青年たち、送り出した娘たち、そして母国アイルランドの大義に神の祝福があるように、とダンは跪いて祈り、全員がアーメンを唱和する。戸外から行軍の歌声が聞こえ、幕。

(3) 劇作上の問題点

「はじめに」でも触れたように、この戯曲の原稿は初演後じつに半世紀を経て発見・復元されたことから推測されるように、テキストがはたして初演時そのままの「完全原稿」であるかどうかは判然としない。以下に指摘する劇作上の問題点は、テキスト編纂上の物理的不備に起因する可能性もじゅうぶん考えられるが、ひとまずこれを「完全原稿」と見なして論じることにする。

(ア) 人物配置の手抜かり

第2場でメアリーを深夜の密会に呼び出したフランクが結局姿を見せなかった理由が明らかでない。第3場で徴兵官のもとへ行き正式に入隊手続きを済ませたことが語られるから、それと関わりがあるのだろうと推測はできるが、勝手に約束を反故にした弁明はどこにも語られていない。第3場で「昨夜はすっぽかして、ご免よ」ぐらゐのフランクの台詞がほしいところ。同様に第3場のケイリの場面で、第1場にいた長男ジョンの姿がどこにも見当たらない。すべての青年が決起したとすれば、ジョンもその中に含まれて然るべきで、例えば、「すでに彼は戦闘に出かけた」等の言及が望まれる。また父親パットにしても、第3場後半の大事な場面では台詞やト書きがなく、彼の対応ぶりが描かれていない。肝心な場面で主要な登場人物に雲隠れされては、読者としては困るのである。

(イ) メアリーのおぼこさ

18歳に設定されているメアリーのおぼこさは、こんにちの感覚からすると違和感があるだろう。フランクの視線をはずそうとする第1場での初々しさや、ダンの失明への軽率な発言などは中学生並みの幼さを感じさせる振舞いである。しかしながら、森の中で男たちの軍事練習現場を目撃した彼女は、彼らは「フィニアン（同盟員たち）」（The Fenians [117]）であると、ダンに向かって明言している。英国支配の打倒を目指して1858年に結成された秘密革命組織 IRB の通称を口にしながら、メアリーにはそれが非合法の恐ろしい暴力組織かなにかのような認識しかなかったと思われる。そうでなければ、フィニアン活動をネタにして不愉快な男たちの鼻を明かしてやろうと目論み、このニュースを喧伝したがる心理は理解できないものとなる。英

国支配の政治状況や歴史認識がメアリーには基本的に欠如しており、それは裏返せば、女にはそうした知識は不要であるとして女性を政治の場から排除してきたアイルランドの社会や教育の問題でもあろう。劇中でエレンが料理や片付けなどの家事にいつも追われているように、家庭を切り盛りするのは専ら^{もっぱ}女性の役割とされ、第3場で娘たちが男性パートナーを失って取り残されるように、政治や戦争への女性の参画は想定だにされていない。男は前線へ、女は銃後の守りに専念すればよいという訳である。「男だったら世の中を大騒ぎさせるようなことができるのに」(116)とメアリーが口惜しがるのは、性差による固定的役割分業への不満の表明でもある。そうした不満の捌け口が、自分を精神的に虐待してきた嫌な男たちの秘密の行状を暴露することでの意趣返しへと向かおうとする。しかし、その暴露がもたらすことになる深刻な影響——名指しされた男たちが、英国当局によって逮捕・投獄され、死刑になるかもしれないこと——にはまるで思いが廻らない。テレビや新聞などのメディアの普及していない19世紀アイルランドの農家の娘に政治的知識を要求するのは酷かもしれないけれど、自分の言動が引き起こす社会的影響への想像力は、18歳の女性ならば当然備えてほしい資質である。第2場は展開的にはメアリーの密告の翻意をダンが促すだけの場面であるが、ひじょうに遠回しな論法で時間をかけてダンが説得していくのは、メアリーのこの「おぼこさ」、社会的未熟さを考慮してのことに違いない。

(ウ) フランクの葛藤の弱さ

第2場の緩慢さとは逆に、第3場の幕切れ近くの展開が性急であり、フランクの決断の早さに強い葛藤を感じられない。彼は本当に愛国心にめざめてIRBの蜂起に参加する決断を下したのだろうか。むしろ、メアリーへの愛という個人的感情に左右されてはいなかっただろうか。村人の衆人環視のなか、フランクひとりが蜂起に加わらない事実注目させる構図は、いわば精神的村八分であり、彼が自主的主体的に決断したという性格を薄めている。

恋人からの懇願を受けたフランクが蜂起参加の決断に踏み切るまでの内面的葛藤は、少なくとも彼の短い台詞からは窺えない。英軍入隊にはフランクなりの論理や合理的理由があることはすでに第1場で彼自身が明確にしており、また彼はすでに手付金も受領し、正規の志願手続きを済ませて「服務契約」は完了している。その点の不履行・変節の責任はいっさい不問とされるのだろうか。演劇の^{インパクト}衝撃性としては、むしろフランクが英軍入隊の初志を貫徹した方が現実的であり力強いかも知れない。孤立無援の状況に置かれても、自分の判断を最後まで尊重するのも、理や義にかなった行動である。

コノリーがこの戯曲を執筆した意図はもちろん、迫りつつある本物の武装蜂起を目前にした

段階で、舞台から檄を飛ばして市民軍兵士の士気を鼓舞し、その家族からも献身的協力の理解を得て、一人の落伍者や密告者も出さずに蜂起へと突き進ませることであつたに違いない。密告者が辿る悲惨な末路が第2場で繰り返し強調されているのは、兵士たちの気を引き締めさせ、密告の魔が差すのを阻止するための威嚇であり踏絵であり洗脳でもあつただろう。遠く時代を離れた第三者の視点から見れば、この終末場面はいささか全体主義的な強制感、軍国主義的集団ヒステリーへの誘惑も漂っている。叛逆に向けた昂揚を背景に、戦闘へ参加しない者は卑怯者の非国民であると告発する危険な空気が舞台には立ち込めている。個人の幸福や選択の自由よりも国家の独立・自由という政治的大義が優先され、^{わたくし}私をとるのか国家をとるのかという、強引な二者択一が迫られている。フランクがいともあっさりと英軍入隊を反故にして、蜂起へと飛び出していく様子は、この理不尽な二者択一の要求を前にして、十分な葛藤や苦悶の努力を放棄し、無意識のうちに「長いものには巻かれよ」式の考えに流されているように筆者には思える。

(エ) パットの置かれた立場

もう一点は、この一家の主人、パットの政治的社会的立場である。パットは結局、「森の奥の男たち」の一員ではなく、近所の多くの面々が軍事教練に励むなか、彼には声がかからなかった。それどころか、蜂起が近いことも知らされず、すっかり蚊帳の外に置かれている。ダンとパットは昵懇の間柄と思われるのだが、饒舌で諧謔的な個性のせいだろうか、ダンやIRB幹部は、パットを政治的同朋としては認知・信頼していなかったことを示している。第1場で語られるパットの大言壮語は、行動を伴わないたんなる言葉だけのものであり、IRBが必要とした人材は不言実行型の人間だったのである。

そこで問題となるのは、戦闘メンバーから爪弾きされたパットが、息子たち（ジョンの消息は知れないので、あるいはフランクひとりだけ）の蜂起参加を積極的に肯定できるかどうか、ということである。（ア）の項目でも触れたように、青年たちがいっせいに姿を消したあとのパットの出番はテキストには描写されていない。一人残った次男フランクが指弾されるなか、父親の彼も黙って指弾者のなかにいたのだろうか。あるいは、フランクが蜂起参加を決断したとき、パットはそれを止めたり、逆に褒めたりすることはなかったのだろうか。最終盤のこの成り行きをパットがどういう姿勢で見守っていたのか、コノリーは教えてくれない。（この点は母親エレンについても当てはまる。）

(オ) 歌詞との連動性の中絶

歌と音楽と踊りに溢れる賑やかな第3幕は、テキストの指示どおりに忠実に演出するならば、歌唱だけでも4曲以上、舞踏3曲、器楽演奏1曲の計8曲以上が必要になる。第1場、第2場でメアリーが歌う唄は歌詞がテキストに引用されていて、歌詞内容と彼女の内面・心理が密接に連動していることがわかる（註を参照）が、第3場では一部の曲名しか分からず、歌詞の果たす役割は大幅に軽視されている印象がある。フランクの重大な翻意はすべての歌曲が終わったのちに行なわれ、音楽は直接的には彼の決断になんらの影響も与えていない。イエイツ（William Butler Yeats, 1865-1939）とグレゴリー夫人（Lady Isabella Augusta Gregory, 1852-1932）合作の一幕劇『キャスリーン・ニ・フーリハン』（*Cathleen ni Houlihan*, 1902）では、老婆の歌う「彼らは永遠に語りかける、人々は永遠に彼らに耳をかたむける」という歌詞が繰り返され、主人公の若者の心を突き動かしている。したがって、第1場や第2場よりもむしろ終幕場面で、メアリーが愛国的な歌を歌ってフランクの心を揺すぶる、という展開が望ましいように思われる。第1場の「おお、バラトレインのテニスン」を、歌詞の意味を十全に理解したメアリーに再度、歌わせるのも効果的な演出になるだろう。せめて、従軍青年たちが歌い上げる曲——筆者には映画『麦の穂を揺らす風』の濃霧の中のエンディング場面が髣髴とされるのだが——の名前の明示は必要とされるのではないだろうか。

(4) 『いずれの旗のもとに？』の主題

(ア) どこまで旗幟鮮明を徹底できるのか

標題が端的に物語るように、この劇の主題は、アイルランド人のフランクが英国軍に入隊することを政治的変節とみなし、自国の軍による蜂起への参加を強く促すものであることは明らかである。しかし、冒頭の略歴で触れたように、このもっともな主張をするコノリー自身がかつて8年もの間、英国軍に入隊した経歴を持つ自己矛盾はどう解釈すればよいのだろうか。あれは若気の至り、いわば脛に傷持つ身だからこそ、入隊反対の主張に経験に基づく説得力があるのだと考えるべきなのだろうか。駐留先のコークで、たとえば、貧しい小作農の強制立退きに加担する職務体験を通して、コノリー自らが加害者・抑圧者の側に立つ自己矛盾を痛切に感じ取っただろうことを是とすべきなのだろうか。この悩ましい点に関して、伝記作家グリーヴズは以下のようにコノリーを擁護している。

ジェイムズ・コノリーが14歳で英軍リヴァプール連隊（King's Liverpool Regiment）第1大隊に入隊したとき、彼は変節行為を犯していたわけではなく、当時の習慣に従っていたので

ある。この連隊はアイルランド連隊と見なされていた。制服は濃い緑色で、バッジは英国王の王冠が載せられたアイリッシュ・ハーブだった。楽隊は行進の際にはアイルランドの曲を演奏し、聖パトリックの日のような儀式には往復の軍隊行進（Church Parades）をしてミサに参加した。³⁸

イーグルトンもまた、この連隊がけっしてアイルランド同朋に対して銃口を向けることはなかったことを以下のように述べている。

その連隊はアイルランド人からなるものと見なされていた。アイルランドでもめ事が起こったときには必ず、その武器は嚴重に銃をかけてしまわれることになっていた。³⁹

隊員のほとんどをおそらくアイルランド人が占め⁴⁰、軍服や演奏楽曲もアイルランド的なものが認められていたこの連隊に入ることは、英軍に仕えていることを隊員に意識させないものだったのだろうし、飢え死にしないためには他に選択肢がなかったという経済的事情や、中学2年生ほどの14歳⁴¹という入隊時の年齢を考え合わせれば、たしかにコノリーの英軍入隊を頭ごなしに非難することはできない。だが、それを言い出せば、『いずれの旗のもとに？』のフランクの入隊志願も非難できなくなるジレンマがある。差し迫った餓死の恐怖こそないにしても、フランクがこのままこの土地に留まっても将来になんの展望も開けない。19歳という年齢は人生を見据える大事な年齢であり、彼の将来設計を邪魔することは誰にもできない。コノリーのように配属先が親アイルランド的部隊であれば入隊は黙認される、というものでもないだろう。コノリーがこの劇で突きつけたのは、究極的な状況下での「信念」「信義」の問題のはずである。グリーヴズの言う「当時の習慣」や所属部隊の環境・性格をもってコノリーの入隊を擁護しようとしても、この根本的な問題提起の追及から逃れることはできない。コノリーの所属連隊が掲げていたのは英国旗だっただろうし、コノリーの給与は英国政府から支給されていたはずだからである。

先述のイーグルトンはさらに、以下のような困惑させる情報も提供している。

コノリーは兵役を四箇月残して軍隊から脱走した。が、この犯罪は、かれの記録が紛失していたため追及されずにすんだのだった。⁴²

少し協道に逸れるが、信義の「潔さ」の問題を考えたい。たとえば、国立大学の教員が文部

行政を批判すること、ある企業の社員が社長や管理職を批判すること、国民が国家・体制を批判すること、これらはそれぞれ正当な権利であり義務でもあると筆者は考える。〈国から給与を貰っていないながら政権を批判するとは〉、〈会社に雇われていながら上司に盾突くとは〉、〈そんなに日本が嫌なら外国に出て行けばいい〉、こうした発言やその発想を容認することはできない。自由にもものが言える社会でなければならない。官庁や企業の内部告発の事例も含めて、内部にいて初めて有効な行為もあるはずだ。しかし、一方で、批判対象からあえて身を離すことには「潔さ」もある。国立大学や企業を依願退職して在野からものを言う方が、退路を断った者の潔癖さがあるだろうし、自発的エグザイルは個人の生涯をかけた重い決断だろう。コノリーの劇から感じられるのは、そうした「潔さ」を持って、という訴えである。イギリスを批判する者がイギリスに雇われて金を貰っていて、いったいどうするんだよ、という根本的な問いかけである。戦後まもなくヤミ米を買うことをせずに餓死した裁判官の話がときおり引き合いに出されるが、法の遵守を説く者が法を破るわけにはいかないという潔癖な倫理観の問題である。

もちろん、なにごとにせよ完璧に筋を通すことは不可能である。中小下請けを食い物にする大企業の横暴をなじりながらも、その企業の製品にあふれかえる自宅居間。物質文明を批判しながら文明の利器に依存している生活。言行の不一致や露骨な矛盾に満ち満ちた人生。妥協を許し矛盾と折り合いをつけていく現実的な生き方。——しかしながら、コノリーがこの劇で要求しているのは、もっと原理的で極限的な生き方、理念のためには生命を犠牲にすることも辞さない生き方（あるいは死に方）、国家という目には見えない理念のために、生命維持の本能的衝動を捨て去ることができるか、という問いかけである。だからこそ、コノリーには自分の英軍経歴の釈明なり総括をしっかりとやってほしいと思う。

(イ) 密告・裏切りの問題

1798年のユナイテッド・アイリッシュメンによる蜂起が、数多くの密告者の存在によって挫折したことを、コノリーは『アイルランド史における労働』(*Labour in Irish History*, 1910)において指摘し、内応した弁護士レナード・マクナリー (Leonard McNally, 1752-1820) や、フィッツジェラルド卿 (Lord Edward Fitzgerald, 1763-98) の隠れ家を通報したフランシス・メイガン (Francis Magan) の名前に言及している。大衆演劇の分野では、フィットブレッド (James William Whitbread, 1847-1916) やブーシコウ (Dion Boucicault, 1820-90) らが密告や裏切りを好んで題材に取り上げ、愛国心を煽る商業演劇のジャンルの一つと呼べるほど人気を博してきた。コノリーが、密告や裏切りについて第2場後半で執拗に言及しているのは、すでに述べたように、市民軍兵士たちの風紀を粛清し、かりそめにも彼らの心に魔が差すことのないよう、最後

の最後に強く叱咤激励する狙いがあったものと思われる。その甲斐があつてか、復活祭蜂起は短期間で鎮圧されこそしたが、密告者を生むことなく決起に成功した点では、アイルランド蜂起史上、類い稀な快挙を取めたのである。

密告者の主題はアイルランド人の関心を大いにそそるものとみえ、密告者が描かれる映画作品には、デイヴィッド・リーン (Sir David Lean, 1908-91) 監督『ライアの娘』 (*Ryan's Daughter*, 1970), キャロル・リード (Sir Carol Reed, 1906-76) 監督『邪魔者は殺せ⁴³』 (*Odd Man Out*, 1947), オフラハティ (Liam O'Flaherty, 1896-1984) 原作 [1925]・ジョン・フォード (John Ford, 1895-1973) 監督『男の敵』 (*The Informer*, 1935), ジェラルド・シーモア (Gerald Seymour, 1942-) の『テロリストの荒野』 (*Field of Blood*, 1985) を映画化した『アンダーフィールド』 (*The Informant*, 1997) などがある。

『ライアの娘』ではパブの主人ライアが愛国者を装いながら密告電話をかけ、嫌疑が娘ロウズィにかかり村八分にされても彼女を見殺しにするほかはない。『邪魔者は殺せ』では「密輸に高利貸し」で儲けているテリーサ・オブライエンが、逃走中の2人のIRAメンバーが立ち寄ったことを警視庁の警部補へ電話通報し (開始30分ごろ)、自宅の外の通りへ送り出して射殺させている。『男の敵』ではジポウ・ノウラン (Gypo Nolan) が報奨金欲しさに組織の親友を密告して死なせてしまう。

フィクションではなく現実に、IRA 内部で4年以上にわたって英国公安部への密告を行ってきたスパイ、マーティン・マガートランド (Martin McGartland, 1970-) のような存在もある。

(ウ) 村落共同体の相互扶助の絆

第2場でメアリーがダンから諭される際の抛り所のひとつが、村落共同体の密接な絆である。病床にあるメアリーの見舞いに隣人たちみんなが顔を出し、めいめいが品物を持参している。とくに高価な物とてないが、日用雑貨を中心に応分の品々が寄せられ、メアリーもそれらをよく記憶しているのが印象的である。困った時にはお互い様、という相互扶助の意識がしっかりと根付いていることがよくわかる場面である。『いずれの旗のもとに?』の設定がアイルランドのどの地方・州であるのかは明らかにされていない。オドンネル家が小農であり、近くに森があることを考えれば、コノリーが蜂起を起こす都会のダブリンではなく、西部あるいは南部の農村地帯を想像するのが自然であろう。アイルランド文藝復興期の演劇が好んで題材としたように、アイルランドの伝統的な農村社会こそが、よきにつけあしきにつけ、濃密な相互扶助の人間関係が構築される場として説得力を持っていたのだろう。労組を率いるコノリーであれば、都市貧困層の労働者階級の人々を登場人物として描き、彼らの団結力や協調心を訴えるプ

ロットを模索してもよかったのだろうが、あえて革新的なプロレタリアート演劇を目指すことはせず、アイルランド伝統演劇の常套設定に依拠する道を選んだものと思われる。

(5) 作品の影響関係

(ア) 先行作品から受けた影響

同じ1867年の蜂起を描き、悪意ある警察の密告で蜂起が頓挫する様子を描いている点で、先行作品として、先述したブーシコウ (Dion Boucicault, 1820-90) の『放浪者』(The Shaughraun, 1875) からの影響が指摘されている。さらにブーシコウの別の戯曲『美少女』(The Colleen Bawn, 1860) のなかの言い回しや挿入歌を剽窃・踏襲しているために、メロドラマ的なユーモアや滑稽な会話が目立つことになっているとも指摘されている。

蜂起への参加を促す主題は、先述したイェイツとグレゴリー夫人の合作『キャスリーン・ニ・フーリハン』(1902) に類似している。英国支配打破のために若者が出陣を指^{しそ}喚される展開が共通している。しかし、『キャスリーン・ニ・フーリハン』では蜂起を促すのはアイルランドの化身である哀れな「老婆」—終幕では「若い女性」として目撃されるのだが—であり、農家の長男マイケル・ギレイン (Michael Gillane) が婚約者ディーリア・キャヘル (Delia Cahel) の懇願を振り切って戦場へと向かう点は大きく異なっている。結婚を明日に控えたディーリアは、当然ながら、マイケルがフランス軍に参加することを押しとどめようとするものの、無力である。彼女は100ポンドという高額持参金をギレイン家にもたらす取引対象とみなされ、副次的な役回りしか持たない。それに対し、『いずれの旗のもとに?』ではメアリーが恋人フランクを改心させ、蜂起へと送り出す大事な役目を果たしている。農村社会で従属的な立場に置かれてきた女性、とくに若い女性の復権をめざす社会主義者コノリーの思惑が強く反映されている設定であると言えよう。

(イ) 後続作品に及ぼした影響

初演の観客席には、市民軍の書記官を務めたこともある劇作家ショーン・オケイシー (Sean O'Casey, 1880-1964) の姿もあったらしい。社会主義 (赤) よりも民族主義 (緑) を優先したコノリーと思想的に対立したオケイシーは『いずれの旗のもとに?』を自伝のなかで激しく批判している。

彼 (=コノリー) の明眸はもはや赤色を見ず、緑色の黎明を求めて蒼穹を凝視していたのである。『いずれの旗のもとに?』と題された彼の芝居は、緑色の照明を浴び、金びかの星

に彩られて、会館の舞台上を感傷的によたよたと進行した。⁴⁴

書簡においても、オケイシーはこの芝居を「ひどい、愚かな、感傷的な代物」と退け、コノリーは「気質のどこを捜しても、芸術家のかけらも持ちあわせていなかった」と手厳しい。

オケイシーはまるで優れた見本を示そうとするかのように、10年後に『鋤と星』(*The Plough and the Stars*, 1926) を発表する。英国旗とアイルランド旗の二者択一を迫る『いずれの旗のもとに?』に対し、「鋤と星」は市民軍の旗印⁴⁵である。そして『鋤と星』の主人公・市民軍司令官ジャック (Jack Clitheroe) に、歩兵大隊を率いてダブリン城攻撃を指示するコノリーの伝令文書は、新婦ノラ (Nora) によって焼却され、蜂起参加は妻の手で阻止されようとする。

『いずれの旗のもとに?』の舞台には、フランシスコ会士・(イタリア北東部の)パドヴァの聖アンソニー⁴⁶ (Saint Anthony of Padua, 1195-1231) の宗教画と殉教の愛国者ロバート・エメット (Robert Emmet, 1778-1803) の肖像画が併置され、宗教と政治の結合というメッセージが暗黙裡に発せられ、終幕間際のダンの台詞におけるエメットの引用(「地上の諸国にまじって、母なる愛蘭^{エラン}が国家となるように」)に続く、愛国青年たちへの祝福を願う神への祈りの言葉で、その主張は明確に増幅されている。ところが、オケイシーの『鋤と星』の舞台においては、エメットの肖像画の横に「まどろむビーナス」(‘The Sleeping Venus’) の裸像画のカレンダーが掛けられ、聖なるものは俗なるものにとって代わられている。これはオケイシーが意図的に設定した、コノリー劇への対抗措置と考えるほかはないだろう。

松田誠思氏は『鋤と星』を含むオケイシー3部作の主題を要約して、「英雄的精神・行動の通念の虚妄と、それが個人と集団にもたらす反人間的悲惨」を筆頭に掲げ、『鋤と星』の主人公ジャック・クリセロウが「対英蜂起と革命の狂熱に酔い、英雄的功名心から家庭の幸福を捨てて無謀な市街戦に飛び出す」姿や、「祖国と民衆のために勇敢に戦う兵士を称え、大義のために我が子や恋人や夫を喜んで送り出す女を「英雄的」と見なす伝統に対して、作者はその虚妄をえぐり出」している、と指摘している。⁴⁷

このように、コノリー劇に対するアンチテーゼを明確に打ち出す一方で、オケイシーが『いずれの旗のもとに?』から無意識にせよ、影響を受けたのではと思われる設定があることも指摘されている。ジャックとノラが抱擁と接吻をする場面を邪魔するのではと心配するゴウガン夫人 (Mrs. Gogan) は、フランクとメアリーが同じ一つ屋根の下で暮らすことへの性的懸念を示すエレンを髣髴とさせるし、ノラが夫のかつての溺愛ぶりを回想する場面は、エレンがパットの往事の熱愛を振り返る場面(第3場初め)に似ているし、聖職服を着た、ノラの叔父ピーター (Peter Flynn) をゴウガン夫人が批判する場面は、仕立て屋フラナガンが素人軍事教練に

励む滑稽さをメアリーが笑う箇所と響きあう。

【いずれの旗のもとに?】の影響というよりも、コノリーという人物への関心は1975年のダブリン演劇祭において、復活祭の日の『ノンストップ・コノリー・ショウ』(*The Non-Stop Connolly Show*)という形で高まりを見せた。英国のマルクス主義劇作家のマーガレッタ・ダーシー(Margaretta D'Arcy, 1934-)とジョン・アーデン(John Arden, 1930-)夫妻の合作になる、このコノリーの自伝劇は全部で6部からなる長編大作で、ゆかりの自由会館において丸1日ばかり⁴⁸で一挙上演された。

おわりに

復活祭蜂起の指導者として処刑された社会主義活動家ジェームズ・コノリーが、イデオロギー論文やアジ演説ではなく文学作品、しかも舞台劇を書いていたことを知り、その作品を実際に読むことができたのは筆者にとっては思いがけない喜びだった。本文で詳しく述べたように、劇作術の観点からは物足りない面もあるが、蜂起直前の緊迫した時期に上演された経緯を考えると、たんなる文学的価値以上にアイルランド現代史の貴重な証言としてのリアリティや質感を感じずにはいられない。2016年の復活祭蜂起百周年には、ぜひとも再演されることを願う次第である。

テキスト

James Moran (ed.), *Four Irish Rebel Plays* (Dublin: Irish Academic Press, 2007).

Discography

“Cailín Deas Crúite na mBó” in A.J. Potter, *Ceol Potter* (Gael Linn, 2006 [CEFCD 034]) and Cathie Ryan, *Somewhere Along the Road* (Shanachie, 2001 [SH 78047]).

“Gallant Hussar” in Eliza Carthy, *Rough Music* (Topic Records, 2005 [TSCD 554]).

参考文献

テリー・イーグルトン(鈴木^{あきら}聡 訳)『聖人と学者の国』(平凡社, 1989年)

鈴木良平『アイルランド建国の英雄たち—1916年の復活祭蜂起を中心に』(彩流社, 2003年)

堀越智・岡安寿子(訳)『アイルランド・ナショナリズムと社会主義—ジェームズ・コノリー著作集』(未来社, 1986年)

佐野哲郎・風呂本武敏・平田康・田中雅男・松田誠思(共訳)『イエイツ戯曲集』(京都: 山口書店, 1980年)

リーアム・オーフラハティエー(北村君太郎 訳)『男の敵』(京都: 世界文学社, 1953年)

マーティン・マガートランド(野沢博史 訳)『IRA 潜入逆スパイの告白』(ぶんか社, 1997年)(原著名: Mar-

- tin McGartland, *Fifty Dead Men Walking*, 1997.)
- Terry Eagleton, *Saints and Scholars* (London: Verso, 1987).
- Nelson Ó Ceallaigh Ritschel, 'James Connolly's *Under Which Flag*, 1916', *New Hibernia Review*, Vol.2, Part 4, 1998.
- C. Desmond Greaves, *The Life and Times of James Connolly* (New York: International Publisher, 1971).
- James Connolly, *Labour in Irish History* (Dublin: New Books Publications, 1973).
- Aindrias Ó Cathasaigh (ed.), *The Lost Writings /James Connolly* (Chicago: Pluto Press, 1997).
- Thomas P. Dooley, *Irishmen or English Soldiers?: The Times and World of a Southern Catholic Irish Man (1876-1916) Enlisting in the British Army During the First World War* (Liverpool: Liverpool University Press, 1995).
- Ronald Ayling (ed.), *Seven Plays by Sean O'Casey: A Students' Edition* (London: Macmillan, 1985).
- Margaretta D'Arcy & John Arden, *The Non-Stop Connolly Show: A Dramatic Cycle of Continuous Struggle in Six Parts* (London: Methuen, 1986).
- , 'A Socialist Hero on the Stage: some of the problems involved in dramatising the life and work of James Connolly', in *History Workshop: A Journal of Socialist Historians*, Issue 3, 1977, pp.159-183.

註

- 1 テリー・イーグルトンの小説『聖人と学者の国』の第1章はコノリーの処刑の様態を詳しく描写している。この小説は、コノリーがもし蜂起を生き延びていたならば、という仮想に基づいて、第2章以降は「想像上の会話」が進行する。
- 2 Robert Welch (ed.), *The Oxford Companion to Irish Literature* (Oxford: Clarendon Press, 1996).
- 3 『いずれの旗のもとに?』はもはや幻の作品ではないが、実はこの作品以前にコノリーは『煽動家の妻』(*The Agitator's Wife*)という標題の処女戯曲をアメリカ時代に執筆しているという。コノリーはそれまで経済的困窮から劇場での観劇体験はまったくなかったそうで、愛読するシェイクスピアが彼の劇作の素養となった。この幻の劇は、独白に難はあるものの、舞台化の価値はある内容だったらしい。
- 4 ノッティンガム大学講師で、2006年にはコーク大学出版局から *Staging the Easter Rising: 1916 as Theatre* という異色の著書も刊行し、同書 pp.21-24でコノリーの『いずれの旗のもとに?』を論じている。
- 5 コノリーと妻リリーの間には、ノラ、アイディーン、アイナ、メイア、ルーアリ (Nora, Aideen, Ina, Maire, Ruaidhre) の5人の娘がいた。(『聖人と学者の国』, p.163および原著, p.107.) なお、「メイア」よりも「モイラ」の発音表記の方がよいと思われる。
- 6 リチェル (Ritschel) によれば、手書き原稿とタイプ打ち原稿が混在するもので、「コノリー／オプライエン文書」(James Connolly-William O'Brien Papers) としてアイルランド国立図書館に所蔵されているという。(p.54.)
- 7 入念に稽古された上演ではなく、台本朗読 (リーディング) 形式で拙速に舞台上演にこぎつけたために、盲人役の2人 (ダンとフィドル奏者) が明らかに目を開いて台本を読むという滑稽な効果を生んでしまったらしい。アビー劇場のチケット価格の3分の2という廉価販売、労組の動員活動にも関わらず、この再演の観客は非常に少なかった。
- 8 これ以降のシェリダンの監督作品を列挙すれば、*My Left Foot* (1989), *The Field* (1990), *In the Name of the Father* (1993), *The Boxer* (1997), *In America* (2003) がある。
- 9 この上演では、自作を演出する登場人物としてコノリーも登場したらしい。コノリー役を演じたのは ITGWU の組合員でもあったレイ・コリンズで、彼はノラ・コノリーとも知己になった。舞台写真なども含む1986年の公演については以下のサイトを参照した (2008年1月8日取得)。http://www.raycollinsmusic.com/photos_jamesconnolly.html
- 10 丸山敬一 (編) 『民族問題—現代のアポリア』 (京都: ナカニシヤ出版, 1997年), p.247.
- 11 戯曲標題としては多少野暮ったいので、たとえば『旗幟鮮明』という邦題も考えられる。

この‘under which flag?’なる表現そのものはテキストには一度も出てこない。標題に入れるほど「旗」にコノリーがこだわるのは、この戯曲初演の2週間後の4月8日に「アイルランドの旗」という標題で文章を書き、自由会館にアイルランドの緑の旗を掲げる決意を表明し、労組幹部の反対を押し切って4月16日に掲揚儀式を行なったことから、強い象徴性が感じられる。(鈴木良平『アイルランド建国の英雄たち—1916年の復活祭蜂起を中心に』, p.145.) なお, C. Desmond Greaves によるコノリー伝やリチュエル論文では、標題から疑問符(?)が削除されている。

¹² コノリーの没後50周年にあたる1961年5月12日、ダブリン市内で最初の高層ビル(設計者はデズモンド・オケリー [Desmond Rea O’Kelly]) 建設のための礎石が定礎され、アイルランド運輸・一般労働者組合の本部があったこの建物は老朽化して危険との理由で取り壊され、17階建て・197フィート(=60m)のタワー型ビルに生まれ変わった。1965年にオープンし、透明ガラス越しに市内を一望できる眺望台に人気が集まったが、1972年の爆弾事件以後、反射ガラスに取り替えられた。現在、この自由会館センターには劇場が設置されている。[Douglas Bennett, *The Encyclopaedia of Dublin; Revised & Expanded* (Dublin: Gill & Macmillan, 2005), p.152.]

¹³ Nelson Ó Ceallaigh Ritschel, ‘James Connolly’s *Under Which Flag*, 1916’, p.60.

¹⁴ 「IRBはコノリーが早まってことを起こし、一致した行動による反乱を失敗させる恐れがあるとみて、1916年1月ダブリンのクラムリンにある実業家の自宅で開かれた会合に連れていった。ここで彼は蜂起の計画について初めて知らされた。サー・ロジャー・ケースメントが反乱軍の武装弾薬調達にドイツへ行ったことも聞かされた。コノリーはこの知らせを大いに喜んだ。彼とプランケットは蜂起の実行計画について夜遅くまで話し合った。」[ユーリック・オコナー(波多野裕造 訳)『恐ろしい美が生まれている—アイルランド独立運動と殉教者たち』(青土社, 1997年), p.132.(原著名: Ulick O’Connor, *The Troubles*, 1975.)]

¹⁵ 入隊者の70~80%を非熟練労働者が占めていたのは、英国化された都会に住む労働者階級の方が権威への反抗心が弱かったことや、まずい食事や下品な言葉遣い、夜間のパケツへの放尿などに代表される軍役に恥辱だとみなす意識が、比較的豊かな農民や教育を受けた階層に根強くみられたことが指摘されている。*Irishmen or English Soldiers?*, pp.5-8.

¹⁶ 「1867年3月5日、フィニアンはダブリン、ラウズ、ティベラリー、コーク、ウォーターフォード、リメリック、クレアで行動を起こした。蜂起は完全な敗北に終わった。十分な武装をし、訓練を積んだ軍隊と戦ったのは、満足な武器も持たないアイルランドの農民であった。3月の天気は、あられや雪の降る冬のさなかの気候であり、フィニアンの内部はスパイや情報提供者でいっぱいだった。数日以内に蜂起は終息した。」(P.ベアレスフォード・エリス(堀越 智・岩見寿子 訳)『アイルランド史 上 民族と階級』(論創社, 1991年), p.196.(漢数字を算用数字に改めた))

¹⁷ ジェイムズ・コノリーと偶然に同姓だが、血縁関係などはないらしい。イーグルトンに言わせると、「姓が同じというゆかりがあって、ジェイムズ・コノリーの戯曲『いずれの旗のもとに』の主役を演じた」とのことだが、同姓だけで主役が廻ってくるとは思えず、この指摘は筆者には眉唾物に聞こえる。—テリー・イーグルトン(鈴木聡 訳)『表象のアイルランド』(紀伊國屋書店, 1997年), p.527.より引用。(原著名: Terry Eagleton, *Heathcliff and the Great Hunger*, 1995.)

¹⁸ ‘Who was the first man shot that day?/ The player Connolly/ Close to the City Hall he died;/ Carriage and voice had he;/ He lacked those years that go with skill/ But later might have been/ A famous, a brilliant figure/ Before the painted scene./...’ [The *Collected Poems of W. B. Yeats* (New York: Macmillan, 1956), p.277.]

藤本黎時『イエイツ—アングロ・アイリッシュのディレンマ』(溪水社, 1997年), p.123.より訳詩を引用する—「その日、最初に撃たれたのは誰だったのか。／役者コノリーだ。／市役所の近くで彼は死んだ。／立ち居ふるまいも声も申し分なかった彼。／演技を磨く年月こそ十分ではなかった、／とはいえ、生きていたなら、／描かれた舞台の前での、／名のある、異彩を放つ立て役者になっていたかも。／山から山へと荒々しい騎手は駆ける。」

¹⁹ 藤本黎時氏によれば、イエイツが「復活祭蜂起を歌った一連の詩は、反乱の指導者たちの処刑に対し悲憤慷慨

慨したり、イギリスの政治機構や政策を非難する諷刺詩ではなく、「親しかった死者たちの生前の思い出を誠実に語りながら、死者たちを悼む瞑想詩に近い」。(上掲書, p.93.) ものである。なお、グレゴリー夫人も「復活祭の週、彼女の愛するアベイ劇場から切り離され、主役の一人であったショーン・コノリー（市公会堂で戦死した）を喪い、この週の出来事の意味をたちまち理解した」。(『恐ろしい美が生まれている—アイルランド独立運動と殉教者たち』, p.180.)

²⁰ 発音は「オウドノウ」に近く響くが、慣例表記に従う。

²¹ 原文は次の通り—Parliament and jails are two institutions invented by the English to keep Irish blaguards in order. The very wild cases are sent to jail but the real bad ones are sent to parliament. (p.108.)

²² カールトン (William Carleton, 1794-1869) の小説『ウィリー・ライリーと彼のいとしの美少女』(Willy Reilly and his Dear Colleen Bawn, 1855) に基づく歌謡と思われる。戯曲の設定が1867年であるから、時代考証に堪える選曲である。メアリーが劇中で歌う歌詞を拙訳すると、「ねえ、起きてよ、ウィリー・ライリー、私といっしょに来てちょうだい、私はあなたとこの国を離れていくことを望んでいるわ」「私は父さんの住まい、家屋敷、耕地も捨てるわ、こうしてウィリー・ライリーと愛しの美少女は去っていく」。——戯曲のなかではフランクの視線や呼びかけを拒んでいるものの、フランクからの求愛を待ち続け、すぐにでも応諾したいわ、という乙女心が露わに感じられる歌詞であることがわかる。

²³ これも拙訳すれば、「おお、バラトレインのテニス／彼はかがり火の周りにいるわたしたちを殺した／しかも皆殺しにもしていただろう／もしその気になったなら」

²⁴ 1761年にヨーマン (自作農・小地主) の子弟により組織された祖国防衛団。

²⁵ 入手した歌詞は7連あり、劇中で歌われるのは第2連の後半部分。拙訳で歌詞を紹介しよう——「ある晴れた夏の朝／鳥たちが枝枝でここちよく囀るとき／聞こえたのは美少女の魅惑的な歌声／坐って乳絞りをしている／美しい旋律のその歌声に／わたしは動くこともままならず／わたしの心は慰めのうちに和らぐ／わたしのかわいい乳搾り娘」(第1連)、「礼儀正しくわたしは挨拶した／おはよう、気立てのよい娘さん／これから先、わたしはあなたの捕らわれの奴隷です／からかうのはお止してください、と答える娘／わたしはそんな貴重な宝石ではありません／あなたに気に入られるほどの／わたしはただの田舎娘／それがかわいい乳搾り娘のことば」(第2連)「インド諸国もかくのごとき宝石は産み出さぬ／かくも貴重で透き通らばかりに美しき／おお、わたしの激情を煽ることはやめて／わたしを愛すると領いておくれよ／憐れみをかけて、わたしの欲望を^{ゆる}恕し／苦悩のなかにもう置き去りにしないでおくれ／おお、わたしを愛しておくれ、さもなくば息絶えてしまう／麗しくかわいい乳搾り娘よ」(第3連)「たとえ偉大なデイマー (Damer) の富があるにしても／アフリカ沿岸の万物があるにしても／偉大なデヴォンシャー (Devonshire) の宝物があるにしても／さらに1万倍もの富があるにしても／アラジンの魔法のランプがあるにしても／その魔神があるにしても／わたしは山の中で貧しく暮らすほうがいい／かわいい乳搾り娘とともに」(第4連)「どうかお引取り下さり、からかうのはお止してください／結婚の承諾はできません／私はひとり、軽やかに暮らし／もっと世の中を見ていたいのです／慣れぬ気苦労に困り果てるでしょうし／そのうえに、わたしの財産はささやかなもの／お金持ちになるまではわたしは嫁ぎません／そう答えるのは、かわいい乳搾り娘」(第5連)「いかず後家はさながら古^{ごよみ}曆／時期がすぎれば無用もの／午前中に売れ残れば／正午には値崩れ必定／五月の薫風もじきに去り／薔薇も美しさを失うものよ／花みな十月には尽き果てる／麗しくかわいい乳搾り娘よ」(第6連)「若い娘は帆船にも似て／このさきいつまで進めるや知れぬ／突風のたびに危殆に瀕す／おお、承諾しておくれ、そして悩みを払いのけておくれ／財産ごときは歯牙にもかけぬ／あなたの情愛のみがわたしの望み／逸楽のうちにあなたを味わいつくしたい／わたしのかわいい乳搾り娘よ」(第7連)。

なんだか、一目惚れした男が、事情も分からないのに相手の娘をむりやりに口説いている内容の歌詞で、第6連や第7連では女性は若いうちが華だ、と脅迫まがいなほど高飛車になっている印象もある。戯曲で歌われるのはそこまでしつこくならない一目惚れ直後の歌詞で、ただの田舎娘、と卑下しながらもフランクから求愛されることを期待するメアリーの気持ちも反映されている。ほんとうに恍惚となるほど美しい旋律と歌唱力でキャシー・ライアンが歌いあげるCDは必聴に値する。なお、原詩は次のサイトより2007年10月

31日に取得。<http://www.musicanet.org/robokopp/eire/prettyma.htm>

- ²⁶ この歌はロンドンの1800年代初期および中期のブロードサイド(片面印刷紙)歌謡に類出し、「若いエドワード、勇敢なる軽騎兵」の別名でも知られている。「軽騎兵」とは主に偵察を任務とする騎兵で、15世紀のハンガリー騎兵をモデルにし、19世紀英国では重装備の竜騎兵から再編される部隊もあったという。歌詞第1連を拙訳で紹介すると、「美貌の持ち主の一人の乙女／父親の門扉の傍に佇んでいた／職務にあたる勇敢なる軽騎兵たちを／眺めんとして待ち受けるはこの乙女／馬たちは跳ね回り、飛び上がり／その馬具は星のように輝いた／平原から彼らはまじかに近づいてきて／乙女は勇敢なる青年騎兵の姿を見つけた」。戯曲の中ではこの後半部分がメアリーによって歌われている(最終2行が「彼女は若き恋人が近づくのを見た／勇敢なる軽騎兵ヤング・エドワードを」と多少、歌詞は異なるが)。入手できた全6連からなる歌詞内容をまとめると、乙女ジェインの方が騎兵エドワードに首ったけのようで、翌朝早く兵舎に赴いて求愛。騎兵は自分には戦死の危険もあるからと彼女に慎重な行動を求めるが、ジェインが涙ながらに必死に懇願するのにほだされ、彼はついに結婚を決意し兵役を離れる、というもの。戯曲の中では、まさか馬に乗ってはこないまでも、フランクが早く自分のもとに颯爽と姿をみせることを切望するメアリーの憧れをよく表わす歌詞である。なお、原詩は次のサイトより2007年10月31日に取得。<http://www.contemplator.com/england/hussar.html>
- ²⁷ 取っ手が雁首のように曲がっているところから付けられたアイロンで、「初期のアイロンはしばしば大型の道具で、仕立て屋によって伝統的に使われたグース・アイロン(goose-iron)はとりわけそうだった」Olive Sharkey, *Old Days Old Ways* (Dublin: The O'Brien Press, 1985), p.86. 同書 p. 87. にはこのグース・アイロンのイラストも添えられている。
- ²⁸ 'goose'は鳥類の「雁」(もしくは家禽の鶯鳥)と「まぬけ」の両義をかけている。フラナガンの顔付き、または教練行進の彼の足取りが雁に似ていたとも取れるし、全体として身のこなしに間が抜けていたのかも知れない。「雁」との両義を訳出するために、「わてが、雁之助だす」などのギャグで知られ、「裸の大將」の画家・山下清の役を演じたこともある喜劇俳優・芦屋雁之助(1931-2004)をここでは「まぬけ者」の代名詞として使ってみた。
- ²⁹ この父親をメアリーの実父と解釈すると、第1場でのメアリーの台詞「それに、私の可哀想な父さん(神様のご加護がありますように)と、私は一度も会ったことがない」(And my poor father, God be good to him, that I never saw. [p.106.])と明らかに矛盾する。コノリーの設定ミスであろうか。
- ³⁰ 皿に残った叉骨を二人で引っ張り、長い方を引いた者は願い事が叶うという風習がある。占いの要素がある点で「御神籤クッキー」(fortune cookie)にも似ているが、まだ引き裂いていないとすれば、要は食べ残しの骨というタダ同然の代物であり、寝たきりのナニーおばあさんにはこれしか余裕がなかったのかもしれない。あるいは、すでに引き裂いて残った長い方の幸運の骨とすれば、ナニーは本来自分が必要とする骨——「大吉」の当たり籤のようなもの——をメアリーに譲ったことになる。
- ³¹ 原文は'Deed if she is anything to her father…'で、ここでは文脈から判断して「彼女の父親」とは養父であるパットを言及しているように思われる。もし、メアリーの実父を指すのであれば、実父もまた「仕事嫌い」の怠け者だったことになる。
- ³² 「鉞」(pike)は1798年蜂起の際にもっとも広く使われた武器であり、長さ3mほどの棒に鋼の鉞先(pike-head)が付けられている。「ト」の字の二画目を傘の取っ手のように丸くし先端を尖らせた形状をしている。鉞先を鑄造することを鍛冶屋に対し禁止し、違反者は玄関先で処刑する旨の通達文書が1798年6月24日付けで発布されている。('Education Facsimile No.91: '98 Rebellion', Her Majesty's Stationery Office, 1976)
- ³³ ジョン・ミッチェル(1815-75)は青年アイルランド党员で、農民革命を唱導する煽動記事のために叛逆罪でタスマニア島に追放刑を受けるも、その後アメリカへ逃れる。1874年にアイルランドに帰国後、ティペラリー選出の国会議員にも選出された。『獄中日記』(*Jail Journal*, 1854)で有名。「ジョン・ミッチェル」という曲について、筆者は不詳。
- ³⁴ 「まるでなにか(=お化け・幽霊)を見たみたいだ!」(…you look as if you had seen something!)と言うフランクの台詞に、「そうよ。けっして忘れられないものを見た(=目撃した)のよ」(Indeed I have. I have seen

- that which I shall never forget.) とメアリーは答え、両者の使う‘see’の意味のズレ・擦れ違いが浮き彫りになる。
- ³⁵ ビデオ *Olive Hurley Presents Irish Dancing Step by Step, vol 1* (Dublin: Ainm Records, n.d.)に、子どもたちによるこのダンスの様子がステップ指導とともに登場する。
- ³⁶ ビデオ *Celtic Feet with Colin Dunne* (Acorn Media, 1995)のエンディングにこのダンスの様子を見ることが出来る。
- ³⁷ 「フィニアンすなわちアイルランド共和同盟…は1858年3月17日、ダブリンの集会で発足した。それは、武力によってアイルランドにおけるイギリス支配を打倒し、アイルランド共和国を樹立することをめざした革命的秘密結社の運動であった。この運動のリーダーは元青年アイルランド党员であったジェイムズ・ステューヴンズ」(『アイルランド史 上 民族と階級』, p.185.)
- ³⁸ C. Desmond Greaves, *The Life and Times of James Connolly*, p.20.
- ³⁹ 『聖人と学者の国』, p.160. アイルランド兵士が仲間を撃たないために銃をかけたのか、アイルランド人と結託して反乱軍と化すことを怖れた英軍上層部が武器使用を禁じたのか、訳文の表現は曖昧であるが、次の原文で日本語に訳出されていない箇所(下線部)を考慮すると後者だろうと判断される。—The regiment counted as Irish and had been well infiltrated by Fenians; whenever there was trouble in Ireland its arms were placed under lock and key. (p.105.)
- ⁴⁰ イギリス軍におけるアイルランド兵の比率は1830年には実に42%、コノリー入隊の前年(1881年)はさすがに21%まで下落していたが、それでもイギリス軍の5人に1人はアイルランド兵だった。Keith Jeffery (ed.), *'An Irish Empire'? Aspects of Ireland and the British Empire* (Manchester: Manchester University Press, 1996), pp.94-95.
- ⁴¹ 英国の小説家マリアット (Frederick Marryat, 1792-1848) の海洋小説『ピーター・シンプル』(*Peter Simple*, 1834)でも主人公が海軍入りするのは14歳である。(マリアット(伊藤俊男 訳)『ピーター・シンプル(上)』岩波文庫, 1941/2001年)
- ⁴² 『聖人と学者の国』, p.160. 事実だとすれば、コノリーは「脱走兵」であり、戯曲の第1場におけるダンの発言—移民はいわば脱走兵であり、裏切り者の警官や軍人と同じ穴の貉である—は、コノリー自身に鋭く跳ね返ってくることになる。なお、原文は次の通り—Connolly deserted the army with four month's service still to go, a crime which went undetected as his records had been mislaid. (p.105.)
- ⁴³ かねてから気になっている邦題である。現金強奪時に負傷した主人公は、たしかにIRA組織にとっては、機密情報を漏らしかねないお荷物、「邪魔者」にはなるが、IRAは口封じのための殺害指令など出さず、最後まで彼を救出しようと努めている。一方、英国警察にとって彼は「邪魔者」というより、単なる犯罪者であり、敵にすぎない。‘odd man out’は、グループから1人を選ぶゲームや選ばれた「鬼」、あるいは「仲間はずれ」や「孤立者」を意味する表現で、仲間からはぐれて、夜のベルファーストを孤独に逃げ迷う主人公を象徴しているように思える。試訳として「はぐれ者」はどうだろうか。
- ⁴⁴ Sean O'Casey, *Autobiographies I* (New York: Carroll & Graf Publishers, 1984), p.646. 原文は次の通り。His fine eyes saw red no longer, but stared into the sky for a green dawn. A play of his called *Under Which Flag?* blundered a sentimental way over a stage in the Hall in a green limelight, shot with tinsel stars.
- ⁴⁵ 「鋤」は労働を象徴し、「星」は労働運動の目標・志望 (aspirations) を表象するとされる。Seven Plays by Sean O'Casey, p.513.
- ⁴⁶ ポルトガルのリスボンに生まれ、イタリアのパドヴァ近郊で死去。百合の花と幼子のキリストを書物の上に乗せて抱えている温和な肖像画で有名。紛失物発見のご利益のある聖人としても有名らしい。Donald Attwater, *The Penguin Dictionary of Saints*, 3rd ed. (London: Penguin Books, 1995), pp.45-46.
- ⁴⁷ 松田誠思「オケイシーの「戦争」劇化の試み—「ダブリン三部作」から『銀杯』へ」、佐野哲郎(編)『豊穡の風土—現代アイルランド文学の群像』(京都:山口書店, 1994年)所収, p.305.
- ⁴⁸ 復活祭土曜日の正午から日曜日の午後2時半までの間で、各部の休憩時間には別の短い芝居が2劇団(英国

の「赤い梯子」劇団と地元ダブリンの「ちっぽけ」劇団)によって演じられたり、アイゼンシュタインの映画『戦艦ポチョムキン』や『ストライキ』が上映されたり、労働歌の合唱や演奏も組み込まれたという。1日限りの上演ではなく、翌週には毎晩1部ずつ小出しに上演するなどして、上演期間はのべ6週間に及んだらしい。

'A Socialist Hero on the Stage: some of the problems involved in dramatising the life and work of James Connolly', p.176.